

った。具体的には、マレーシア・香港・スリランカ・バングラデシュ・フィリピンといういわゆる Outer Circle からのゲストに加え、日本と同じく Expanding Circle に属する英語話者としてのフランス人にも出演してもらった。従来のテレビ・ラジオの英語講座が専ら英米語を対象とする中で、この番組の目的は、英米語の言語的・文化的規範を超えて展開される国際英語の世界を、できるだけ多くの英語学習者に知ってもらうことにあった。またこの番組で本発表者は、「国際英語」と同様の現象はどの言語についても起こりうることを示すために、「国際日本語」の例として、日本的価値観ではなく自己の思想の表現手段として日本語を用いている米国人の David Goodman 氏の随筆も紹介した。

最後に、本発表者が現在取り組んでいる、大学での一般英語の授業における国際英語の試みについて紹介した。これは近年の構築主義の理念にヒントを得たもので、「国際英語の実践共同体」への正統的周辺参加を主眼としている。特に、現実の国際英語使用者の日常的な言語活動における「ニュースの視聴・読解とそれに関する議論」というタスクに着目したものである。

この授業では、CALL 教室でインターネットと衛星テレビ放送を併用することにより、CNN のような英米メディアのみならず、たとえばシンガポールの Channel NewsAsia の放送や中東の Aljazeera の英語版ウェブページなどの非英米的なメディアも参照しながら、授業当日のニュースを視聴あるいは読解し、その内容について受講者と英語で話し合う。また、生の国際英語素材に加えて、受講生の中には留学生もあり、国際英語のインタラクションが教室内で展開される。

本発表者は、TOEFL 等で高得点を取った留学生に対しても、受講の免除はしない立場である。「国際英語」教育では、英語母語話者さえも学習者と見なすべきであり、Japanese English などの国際英語の話者とのコミュニケーションを実地に学んでもらう機会であると考えている。「国際英語の実践共同体」は、日本人学生と留学生、そしてリーダーとしての教師も含めて、全員がお互いに学びあう場である。

参考文献

- 日野信行. 2003. 「『国際英語』研究の体系化に向けて：日本の英語教育の視点から」『アジア英語研究』第5号. 日本「アジア英語」学会. Pp.5-43.
- Hino, Nobuyuki. 2001. “Organizing EIL Studies: Toward a paradigm.” *Asian Englishes* Vol.4, No.1. Pp.34-65.

英語関係節の難度決定要因の探求

伊藤彰浩（愛知学院大学）

1977 年に Keenan & Comrie が提唱した「格階層」(Case Hierarchy) は、元来、含意的普遍文法理論であり、言語における文法関係の階層性を意味している。この階層が基づく関係文法では、文法関係が統語配列（構造型）を規定することが前提である。1980 年代に入ると、SLA 研究における有標性理論が注目を集め、「格階層」の提唱者のひとりである Keenan (1975) によ

る「格階層において主格に近い関係節の種類ほど、使用頻度と理解度は上昇する」(p.136)との予測が取り上げられ、格の文法的役割の違いによって関係節の難度は変化すると考えられるようになった。しかし、SLA 研究において属格が主格に匹敵するほどの高い正確度で解答される点が複数の研究者によって指摘されるようになり、格の文法的役割の違いが関係節の難度を決定づけている、との考え方に疑問が投げかけられるようになった。その後、関係節の種類とその統語配列（構造型）の差に注意を向け、構造型文法観に基づく分析によって関係節の種類とその難度差を説明する方法が Hamilton (1995) によって提唱された。Hamilton は、関係文法に基づく解釈に一応の価値を認めつつも、関係節の難度決定要因として格の違いが機能することは認めず、関係文法から構造型文法への理論的枠組みの転換が必要であると主張した。そして、関係節の難度変化は *wh*-抽出によってなされる句の不連続性の程度によって規定されたと考えた。筆者の論文 (Ito, 1995) では、属格の難度は *whose* に後続する格の文法的役割の違いによって変化することが明らかとなり、構造型文法の有効性は示唆されたが、格の文法的役割の観点から難度変化を検討したため、理論的枠組みとしての関係文法からの完全脱却は不可能であった。しかし、この仮説が提唱されたことにより、関係文法よりも構造型文法が有効であると主張できるようになった。Hamilton は、英語における間接目的格と前置詞の目的格の相違点に着目し、関係文法では異なる範疇（間接目的格、前置詞の目的格）に分類される格も、構造型が同じ場合と異なる場合の 2 つが存在する点を指摘した。前置詞句には項 (argument) の場合と付加部 (adjunct) の場合が存在する。そして Hamilton は (1) 関係文法の理論的枠組みにおいて同一の範疇に分類されても構造型が異なれば、L2 学習者の解答における正確度で測定される中間言語運用は有意な変化を示し、(2) 関係文法の理論的枠組みにおいて異なる範疇に分類されても、構造型が同一であれば中間言語運用は有意な変化を示さない、との仮説を設定した。米国で英語を学ぶ L2 学習者を対象に調査を遂行した結果、彼らの中間言語運用は、構造型が異なる場合のみ有意な変化を示す傾向がみられたが、有意水準に達しなかったため研究結果は保留となった。

本論文では、対象者の抽出法と統計分析法の手法を改善するとともに、タスクを項目分析によって妥当性検証を行い、より厳密化された環境下で replication を行った。調査を遂行するため、以下の仮説を設定した。

仮説 1：同一の前置詞の目的格であっても、その構造型が異なれば、学習者の中間言語運用における正確度は変化を示す。

仮説 2：前置詞の目的格であろうと間接目的格であろうと、その構造型が同じであれば、学習者の中間言語運用における正確度は変化を示さない。

仮説 3：項が果たす意味上の機能（シータ役割）が異なっても構造型が同じ項であれば、学習者の中間言語運用における正確度は変化を示さない。

被調査者：日本人英語学習者 116 名。

調査材料：文章結合テスト（各 5 項目、計 30 項目）。

調査手順：採点：英語母語話者により提供された模範解答を参考。

信頼性：クロンバック α 係数：0.84。

妥当性：テスト項目の弁別指数（点双列相関係数の平均値）0.26。

統計分析（分散分析、ライアン法による多重比較）。有意水準： $\alpha = .01$ 。

調査の結果と考察：構造型の差のみを変数にしたテスト項目の得点間においてのみ統計的に

有意な差が認められた。したがって、関係節の難度を規定する要因は格の文法的役割の違いではなく、構造型の相違であることが示唆された。この結果は「格階層」を安易に理論的枠組みとして利用した SLA 研究者たちへの警鐘としても理解されるべきである。

結論と今後の課題：今後の調査では理解レベルの観点から本仮説の妥当性を検証すべきである。

注：本論文の内容の一部は、大学英語教育学会新人賞受賞論文（Ito, 2001a）に基づいている。紙数上の都合、具体的なデータと分析結果は割愛した。詳細は Ito (2001a) と伊藤 (2001b) を参照されたい。ハミルトン仮説の理解レベルにおける妥当性の検証結果は、Ito [in press] を参照されたい（2006 年 1 月ベルギーリユーベンカトリック大学応用言語学研究所刊行学術雑誌 *ITL Review of Applied Linguistics* に掲載予定）。

参考文献

- Hamilton, R. L. (1995). The Noun Phrase Accessibility Hierarchy in SLA: Determining the basis for its developmental effects. In F.R. Eckman, D. Highland, P.W. Lee, J. Mileham, & R.R. Weber (Eds.), *Second language acquisition: Theory and pedagogy* (pp. 101–114). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Ito, A. (1995). An investigation of the influential factors on the difficulty of the unit ‘whose + NP.’ *Annals of Educational Research*, 43, 67–72.
- Ito, A. (2001a). Japanese EFL learners’ sensitivity to configurational distinction in English relativization. *ITL Review of Applied Linguistics*, 131 & 132, 11–33.
- 伊藤彰浩. (2001b). 『共時的アプローチによる英語関係節の習得研究』東京：リーベル出版.
- Ito, A. [in press]. Japanese EFL learners’ sensitivity to connfigurational distinction in English relative clause comprehension. *ITL Review of Applied Linguistics*.
- Keenan, E. (1975). Variation in universal grammar. In E. Fasold & R.Shuy (eds.), *Analyzing variation in language* (pp. 136–149). Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Keenan, E. & B. Comrie. (1977). Noun Phrase Accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry*, 8, 63–99.

小学校における Storytelling の実践 ——現場教師との Collaboration による Action research ——

八田玄二（梶山女学園大学）

筆者は、2001 年夏から 2003 年の夏まではほぼ 2 年間にわたって英国のヨーク大学教育学部の MA in Teaching English to Young Learners (TEYL) by Distance に在籍し、本年 7 月、そのコースを修了した。

JACET 月例会の発表では、プロジェクトとして行った小学校 4 年生を対象とした Storytelling